武蔵名所考

稿

L290.3
1

武藏名所考卷三

晃嶠陳人編

内閣文庫藏書之印

葛飾

名所抄類字名寄松葉歌林並に下總と載る但名所抄
に葛飾浦と作名寄に勝鹿と作る
萬葉集に云可豆思加又勝牡鹿又勝鹿又可都思加又可都
思可又可豆思賀
仙覺抄に加ゝしの八下總の國葛飾の郡なりかの加
きの郡のなとの大河あり妹と井とゝいふ川のほとり
とゝ葛東の郡といひ川のあり我葛西はあるを

とゝのなり

延喜式に云下總國葛飾 加止 思加

和名抄に云下總國葛飾郡と今も利根川の西

丈木集に云かゝしのゝうら下總

桜さゝる葛飾ハりと下総の郡名なれと今も利根川の西

とゝく武義の葛飾郡となされしをそこに載ぬそゝ

説角田川の下にあゝいかす

よゝ人ゝらに 萬葉集

あかつきのかたきの田のとゝねてきゝられくるたのれとつきあかつゝ

源俊頼朝臣 家集

かゝるの井ときの田のとゝねてきゝられくるたのれとつきあかつゝ

藤原道經 續後撰集

あゝかつゝ乃浦まれ浦のうらつけまれとゝ人の恋きあかそ

角田河

名所抄に角田河下總發河二所とゝ又下総の下に一説

武蔵通両國境と注ゝ雜基及び業平朝臣の歌と載せ

又駿河の下に一説大和と注ゝ源家長卿のいはらゝ

すゝゝ河原といふ歌を載せ類字松葉歌林角田河下

総と載せ名寄に住田河武義と載せ

桜さゝ乃角田川武総の堺乃川なるゆゑ或ハ武義

とゝ或ハ下総とゝる事疑へつゝ決まれとも今葛

飾郡より隅田村にながれいる川を下総の国と境
より海へ流れ落ち
萬葉集に云角田河
仙覺抄に云ちかさまみちの紀伊守
八雲御抄に云ちかさ川下総国なり
建保三年内裏名所百首員録に云角太河武蔵
文木集に云ちかさ川駿河武蔵大和伊勢
藻塩草に云角田川下総又在駿河同名但是は大和
に云説あり
在原業平朝臣集に云むさしと志つまの中にあ
ちかさ川のつらにわりなく思ひ侍るよいとゝるのふ

遠くまできてきよりわりなくもの思ふ我とこそ侍り
けれ八雲にのりくさとゝんと侍るかたにみな人物出
しくわりなくとなきものを思ひぬるよ志ろきものゝ
とあるとあり紀ノ河つらに侍る我ゆゑ思ひ侍
りけれ歌ゆゑんわりなくもいひ侍る歌
古今集詞書に云むさしの国と志つまとの国との中に
ある角田川のほとりにて舟のいと志うおとゝえ
きれ志ろきかりなく思ひやる歌
かきりもなくとゝわくきにたるの舟と和ひわ志な
このめとるにわりなくもあるかな
あれハあよのるとくわりなくもあるかな
うんとゝ侍ふこゝ人ものゝ

おくて京にはのぼる人なくよはのこしたるをりにたちき
ものもたちとはのとあるをよ川のわたりふあそひそう京に
見えぬものなりけれはこれ人見てらにわてーのもりり
はれハ何のものそとひきれハこれをん都のものとひをる
伊勢物語ニ云狩のきゝてをさゝの国とものつふさの国
との中にいとはるをよある川ありそれを角田川といふ
はたちとりにもれぬく思ひやまてをかをりなくとをん
こもきにけるをとひとひをよ渡ーるとやあふ
の雑日記ニ書ぬとこををををとをるにこれ
人物をひ〳〵こそ京にはのの人なきをもはのこに
さをれ打〳〵をたをるきをるをとはのとあの我

をきのはたはなるこれのうくはをひていををこそ京
をのををををををぬ島なれををを人見をを次海〳〵をををひ
なれををまををんこををををるといの
更級日記ニ云下はきのこをとををををををひをを有をと
井ニこそ　長本ニハ井又ふ井ニ作　ふをみのをを半はをををれわこ
りををはりて云云武蔵ハ
をとの在五中将のいをををををんとよみけるわこりを中
将の集ニををををを川とあり船をくををりぬをは
おををの国をなりぬ

勢語臆断ニ云更級日記ニをををををの国とをををの
ををひををくある物をの川とこのをを海をををのはを

さまりて武蔵の國の日記をとりてむさしきかを
の中よりあるいはあるいは川といふ人有又中務のいさゝ
とよゝけふとゝりて中務の集ハ角田川とあり再
あくわりぬれハさあるこの國よりなりぬとなるはなる
かゝ中務集ともいふ物語紙さをるもや但孝標
女上総の國より都へのぼるとて絵ゝれる乃紙をる
さまゝゝれを更級日記一向用まゝきまあるゝ
第第集第二ハ弟基法師まちゝ山々ゝゝ
いわ橋の角ハ何ハよりかも移んとよめ歌ハ
後何なりとゝり又業平ハみちのくのかゝ下向
なるゝ下絵ハ何せんと越られんと字ゝゝ

いゝれある紀更級日記を引合られて角太川の
名ゝのれこれゝゝあひ有
武蔵志料云更級日記の異本ハ武蔵と下総乃
間ゝ此條ゝゝ川有ゝゝハ今の世ゝ言傳ゝ
ゝゝ或ハ後人のゝきさあうふ入遠ゝるや多本ゝな
武蔵相模の堺ゝありゝ この作者まゝ幼稚の童女の
なるものなれゝ國なのゝ
高田與清云此日記ハ太井河隅田河多摩河相模河
の四川を渡ひ混ゝく書ゝれゝ證ゝ
異本更級日記云下総ゝゝ
あるゝゝゝ川ゝゝゝ在ゝ中將ゝゝゝ

なるわたりあり中程の集まハ隅田川とあり歩渡のさ
まにさてわたりて川よりやゝ下りて云云武義と相模と其
中よりふとる川とあり毎年わたりぬれハ相模の方にあり
ぬ
高田與清云ふとるこのたハ異本にふと并このたとなる
とたゝしとたハ義経紀三の巻頼朝謀反の條よ
さてこそふとるとんさうちおえていふはゝよりきゝ
ひろ吾妻鏡一の巻治承四年十月二日の條よ
武衛相乗千常胤廣常等之舟檝濟太井隅田両
河なと書たるはなりさて太井河を今江戸河と
を新利根ともいふ河の事なく吾妻鏡九月廿九
日の條に武衛當時御在所下總國十月一日の條に
武衛驚沼御旅館なとゝ云ふて太井河の彼方よ
りはゝに常胤廣常ら舟檝の設をなりて河をわた
る武蔵國よ赴ける途中隅田の宿なる乳母寒河
尼よ逢ふ云ふ九月廿九日の條よ葛西三郎
ら太井の要害とあるも今の國府臺あたりなるへく
却て武蔵の境の今江戸川なる隅田河ハ武義の國内
乃河なる事なきなりそのころ葛飾郡江戸
川よりこなたハ武義よ隷き後よ下総ゆ隷きに
を別よ考へり
按ずに通行本更級日記よ志のゝ事ハ

の國乃さのひあく宥神とる川といふ相通とを
神と即吾妻鏡よりの大井ある〳〵濟太井隅田
兩河とあるよ接れハ太井川も今いふ江戸川一名新
利根と云川なり更級日記よ玉手羽のいとゝハ
んとよゝなるゝとりなりといふるその頃ハ江戸川と
隅田川と水上相通〳〵れるかくもるされ〳〵まも
さく業平の時よりも隅田川をもく堺とせるとうえ
たり其の神ともむの〳〵よりの傳えのこりて隅田川を
も武蔵の境と定〳〵より総と相模の境ちこの紀を
あやまり江川より西を相模の國と心ゐる〳〵なるん
されともむさ〳〵さかこの中にあるあるさ川このふこれ
そ今の隅田川のやうよ皆ゆ又ふこみのせといふ今
の葛飾郡柴又村の辺よあるかゝあきの流ある人紀乳
まりこゝの流を今の松戸のるゆや彩考〳〵

吾妻鏡よ云治承四年十二月二日武衛相乗千葉常胤
廣常等之舟渡濟太井隅田兩河精兵及三萬餘騎越武
蔵國豊島權守清光葛西三郎清重最前参上又足立右
馬允遠元兼日依受命為御迎参向云云今日武衛御乳
母故八田武者宗經息女相具鐘愛末子参向隅田宿則
召御前令談注事給

源平盛衰記よ云兵湊佐頼朝八平家の軍兵左國(下
向のよ〳〵関のひ武蔵と下総との境ある隅田河ふ上陣

をとりて國々の兵船めされたり
義經記に元治元年四年九月十一日武藏と下野堺のひ
なる松戸の在市川といふ所よりはきたるの御勢八万九千
とぞ申ける今日こそ坂東に名をあらる大河戸のこの
川のこなたよりは此國利根の在家とこそ下り給へ
こなたのみ遠く家よりてこそ在五中將は隅田川と名
付けたり海とり潮さしたりけく源よりも雨ふり洪水岸
をあらそこそ流れたりとこそ海をみるの如く水よせ
のれくる日遥留しのひすこのわたり兩方に陣をとり
やがて船き櫓の拍子八馬をつるをとく源氏を待たり
高田與清云此文治元年四年九月十一日とある八吾妻
鏡に云ふ吾妻鏡一の巻に十一日武衛巡見安房
國九御厨給とあり武義と下野の境と有八下總の誤
なり更級日記にも書たるやうなる例あり松戸の在市
河とあるとあるハ下總の國内にて大井河より八彼方
なるべく吾妻鏡一の巻治元年四年九月廿九日條に
當時御在所下總とあるえ十月一日の條に武衛鷺沼
御旅館とあるもかく下總に居給ひ記なり坂
東に名代なる大河といふも大井河の事にて今江
戸川にも新利根にもよらず利根の上流にて也在家中將の上流
なる川とそ名付たるといふも誤なり是こそ大井河
を隅田川と書ひたるべし書もいとかりに源平盛

義記平家物語の長門本屋代弘賢氏の渭田河堰
本記の考證に引きて源平盛衰記羅卷をとこれと
云ハ郡人らきて法ていとまるなりなまハあるまゝに
ときたもいのゝたすんとのゝとりあゝ陣取ての上を
江戸太郎ゝてれをきゝて待設ゝよゝの語ありた
らんと脱落せり
北條九代記に云上総權介廣常ハ當國の軍勢二万餘
騎ゝ引率ゝ渭田川の辺ゝ来向ゝ云云渭田川をとゝり
て武蔵國ゝ入るハ畠山菖西足立の人ゝ弛付ゝり
又云文治五年七月十九日頼朝ハ奥州追伐の首途ゝ
ゝ千葉介常胤八田左衛門尉知家を東海道の大將

ゝて常陸下総両國の勢を率して宇夫行方を強く
岩瀬より渭田川の渡ゝて渡り給ふ
吏未集ゝ云安嘉門院四条ゝ侍りゝ事ゝ
ゝと異ゝとあるかゝ我ゝかの郡名ハ寄
源頼記ゝ云ゝ那須ゝ紙ゝ
りかゝひゝをとゝく行すゝ河の渡ゝ
ゝと郡名ゝハ
太平記ゝ云小手差ゝより石濱まて坂東道すゝた四
十六里を片時ゝ間ゝて追付きゝる將軍石濱をうち
わゝりゝ
渭田川考ゝ云天正本太平記ゝ石濱を渭田川ゝ注ゝる

静勝軒詩序ハ云城之東畔有河其流曲折而南入海
商旅大小之風帆漁猟来去之夜篝隠見出没於竹樹
烟雲之際
静勝軒詩跋ハ云凡遊關左者必以見富士山過武蔵野
渡隅田河登筑波山則皆誇四方觀遊之美也
又云亭曰泊船齋曰含雪云云西北有富士山有武蔵野
東南有隅田河有筑波山此四方之觀在此一城也
北國紀行ニ云角田川のわたりを越のはきれ艦して
角田川とうかひぬ東岸ハひたすらに住けり利根入間
の二河おちつのる所ニ彼方きし渡ニあり東の濱ニ遊村
あり西濱より孤村有水西悠々として西岸に和とうく

晩霞曲江ニなれる帆野ニとまりて船のとまりの白波
蒼穹ニ東ニあり冨士碧霞の西ニ有く絶頂ニ入る
きえんとして殊ニ夕日紅華勝月空ニかゝる扁雲ニうく四
域ニ和平なり云云入間の船渡りまく見ゆる人あま
たなり入間川の船きりいつくをわたりとる志
小舟のはしりしこのひの青のゝ多みてゝ後に光を待ゝ久云云
田園雜記ニ云かゝて隅田川のわたりにいたりくゝ多く
寺ゝゝて故蹟多ゝていまゝの塚のたゝ者ゝ今ハ
こゝゝに知るゝくゝ云云船ひきくて川ゝ上ゝ行て都
多ゝゝのひんゝて人くゝゝゝのひける
東路のはゝとゝ云江戸のゝゝて九はりゝ一荷ゝてゝみゝ

川の河舟にて下總の國葛西の庄に河岸を出船より
江の戸にのぼるまでは雲霧を離れ波の浦よりかよひ
こゝに住居し居くらしたりはかを船にてこぎ
ちらして今舟とゝまりはかりて淨土門の寺淨專寺云云
名所方角抄云角田川下總の中なり都鳥よりの
入間の川のほとりの事なり
又云荒川といふは秩父山よりながれ出る西より東へ
なゝめに出る大河なり
武藏野紀行云大江の庄なる紙もよやうくらみさ
川ふるもつきぬ河つらをたゝれはまことに絶たるのはし
とあゝとあゝきるのむまとあるく奥をゝよ ありさ海岸を

この紙奥書
梅花無盡藏ハ云開窓則隅田河在東
又云水戸公号羅釣翁得和歌之正脈余在洛而聳厥
譽久之矣今也共寓武野之佳境隅田之上流往還無虛月
又云都鳥隅田之故事也河邊有柳樹蓋吉田之子梅
若丸墓所也
又云道灌靜勝公招福鹿西山請尊宿并少年浮畫船
數艘於隅田河鼓吹一時之壯觀
又云隅田在武藏下總兩國之間路傍小塚有柳道灌
公為攻下総之千葉構長橋三條
擧白集云角田河ちゝとまてゝ今も五ふの

[illegible]

[illegible]

又云国[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

惺窩文集[illegible]云浅草之東畔跬歩而有角田川輕舟短棹

浩歌一望有鳥翩翩可愛所謂鴫與脚赤者昭々乎倭歌

集中不問其名亦知為都鳥

羅山文集[illegible]武蔵國隅田川在武蔵下總之界有鳥曰

都鳥喙足皆赤形似鴫倭訓志義好食蛤昔在原業平来過

詠和歌

丙辰紀行[illegible]都鳥角田川の物なれハ好事の人ゆゑ

[illegible]

[illegible]

竹齋物語[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

地名人の歌より都名を寄せ後始とも見の赤き鷺の
大きさの名といへども其の名今も見え侍りて都名
といへば白鷺のみの嵯峨と見て赤れしも鷺より大
きく白きなるの所大きく形丸大きなる也
又云海る日子八尺のかすみ川都名とそ
思へ見ハ泉為景の海寄角田川の所名あり
川といへ名さすは辺に隅田のひとく立ありそこ
を流る川を隅田川と云その事この付侍りたる所
又角南と書てもかとも漢字なる角田川をすみ川
とよまさるやとりくなのなるなるや
江戸童子云浅草川角田川とも云又三屋戸川とも云
川とも八力根川とも云なり
玉櫛笥云後土御門院の御時長禄の頃江戸の大田
道灌入道とも都にのぼりて内裏へ参りけ
れば道灌八ちとさ川のかとりに住むるよ〳〵ぬ
及ばせらるさてあく侍るのこと八よくこそ知ぬるんとあり
れ名かりてまりて此〳〵姫道とまさしき都名すす
ちと川原と宿を出れとも奉ることきれてみのと
あの名をとて武蔵野八かやはらの時と申し〳〵かとかる
ことなれ花もなるのの外と御製我〳〵のひとれ八道灌
とたりかとくかとまりとく寄道の寄加この事とさく
名とこそとやのく侍ひくく侍ひなる

濃華寺縁起に云ふ武蔵國宮戸川の邊に茅の
渙父竹の名有り橋熊の濱成竹成と云ふ所なり成辺
に出て浦に流れ出ひ世紀に云ふ本朝文粋に
再訂江戸鹿子に云ふ古武蔵と云ふ所なり
と云ふる物語の文を讃て人皆渇り川下の橋の
名を安國橋と名付て移る所元祿のころ那の名ひ
を革め河のほとりを名付て武總の界八利根
川なる事再ひ世に明なり
武蔵志料に云ふ郡鳥古人海鷗の説有る白
鷗なる事疑ひなし個此鷗ふ二種あり大小共異
なるのに関東海濱土俗の方言に大鷗を濱猫と云
はまねこ甚野猫の如く食料に成大さ鴨の如く少なる
物を鳩なりとあり故に其の細く長き墨國川なる
に長きこの小鷗之常八此あり此川に住を海に
有るやうなる海鷗なる侍ぬを作まり長蘭の風雅なる
海の荒る時に出て来るなり上に花咲く波静なる墨國
川のなりに成る郡の人を海と呼くして
此を紙八見て長く此物ふ有と人傳に此のこと八なれの
見なりと人有と此白鷗まに見て醤と人赤く
して体八白く翼に黒き鳥なる是八鄙のさのひとりあり
らしなれ八雅その人ら郡なる八名付なるべし
又云北條五代記今八諸國治り天下罷遠浪のうち

まてとゆとゆとして靜なる御時代なり然れとも兵
船多く江戸川に つる船ゆきかよ今業に江戸川と慶長
の頃いふるといふことはさてはなしとはいへとも知
らくるを今の角田川の事なるへし當時江戸川といふは
新利根川の事にて其間國府臺下より流るる川にて
是をかりめ江川とも云ふる事北條五代記國府臺合戰
の條に見えたり是は上総下総より江戸へ往來運送
の川なりしなり但し宗長関東紀行東去產
といふ書に角田河の川あるく下総國葛西の府に
関所ありよし芦を立つのく云云と有この葛西の府
乃角といふは今の小名本川のるまて是より中川を横ふ

ふるく行徳へわたりしたなりひ有しに後世江戸川といふ
新利根川是此川續されはその事く後第川の事川筋なるへし」
又云ふ所ふ川の源は上総國利根庄義家より出とこれ
を奥州にかよ今の行方郡なり是は今の利根中川なと
のわたりを云へしなるん今は此川をその源本國秩
父の山中より出く荒川と名つけくかよ川筋多り
又云荒川角田川の源にして秩父郡是三郡の通まて
荒川といふ江戸まては角田村なり故名有宮戸川
ともいひ浅草川ともいふその源は信濃國佐久郡金峯山
の陰より出る式毛濃川といふこの水とりつのる流るく鶴
溜へとりなりその東に三峯あり此より二派に分る

茶臼山と称する城神流川の源とす この千隈川と樺川と合して犀川に入て越後国新潟の海に入 この千隈川を信濃川と云なり 荒川 この荒川上の名所〻水秋父の山中城より出る川越を流れて戸田の渡り岩鼻川口尾久の渡りあり 此荒川を名付て隅田川と名付く

桜堤 この名まゝ秋父の山中城より出る川越なり

いるまあり 之川越領を流れ比企高麗郡より流出る川なり 即ち入間川の事なり 此川河越領城下を流れいまゝ荒川に合せさるうちなり

又云角田川の河舟なく葛西の庄の中城村とあり

また武蔵庄堅川通り城村なくさるをるより中川を隔て行徳の今井渡りこゝあり 又或云今の堅川は本庄の用水〻頃堀〻といひて少名栗川毎年を中川に出る故いつ秩父二郡にたつゝ葛西の庄は国府にて今の国府基なれと新利根の川筋なり

三芳野名所舊跡記云熊谷下を流れ来る川を荒川とゝ名下ゝ戸田川 新渡之川越の水上を秩父より来る荒川村云不有 此東是三郡の境を流る

四神地名録云隅田村土人云村と称名おのゝ川を此村より北に是三郡と葛飾郡の界あり 隅田村とよぶと隅田とゝく有今も堀ゝく如ゝ此流れ

なりしも何れの村の土人も古渡田川と唱へり南国の
名所古蹟なる渡田川乃実跡なるべし
又云中川と綾瀬川とよりてなりしく古渡田川といへり
今も堰つきく川幅僅に一間余昔時は中川と派ふ有り
て荒川へ流れ合く海に入るものゝ土人乃云ひ伝へ六
古渡田川乃水こゝ深ひし蒲原村八古人の歌にて今も
宿といふ地名残まり云云今渡田川と称せる地八二
百四五十年以前は海にして川のある為きやうなり
なれも土人のいふ古渡田川実跡なるべし
渡田川考に云この川のよりてきしく来ゆるあり一派あり
これその源流を推るに利根川といふ義経紀に

南国川を利根の左岐原といへり蔭くこゝかみ
遠くとひ北国紀行に利根入間の二川ゆらゆるとも
いふ是外り此川もあるべき流のなく廣のしとゝ
とゆふ所ハその流をうつのれく荒川に出てへくもゆう
ゆきされとわつのに原の頃乃国ゆきよりほと廣
川とゆふ所ハ世ゆきしハ近き世ゆゝこゝ
又云古渡田川といふる小川あれとおのゝ此川必
古今流をこゝにせしこゝ
この外廣く来ゆこ廣原の田地を常ひ河原ゆゝ
ゆゝけしとゆゝこゝく古歌ゆも多く渡田川原とゆゝ
されも今の渡渡ゆゝ

世ひさしきを又なり爾ふりにたれば一ぢう
の大河となりしとぞ義経記に爾ありて渋谷の家綱
もとゝく流れ〳〵うるひとゝ海をとるゝことゝ是あり
また北條氏康の武蔵紀行に此河のもとひと安房
上総まのあたり見渡さるとゝの以ぢを爾所うちもら
けく河のそこにこゝに廣沢こと出る人〳〵おのゝ廣
長のこゝろよりはらを河原も次第に新墾の地とせき人
家もいやまし〳〵それとあるよりせゝをそれ流もやうやく
古のこゝろの二筋そんとなるかたしなる人〳〵されも
いまこのゝゝろ狩り田を潟に細流ありこれ古渕田
川の一なりとゝ是をいめ人流も廣しあるなれい

ふる渕田川といへんもゆゑなしゝ四神地名録に云中
川と綾瀬川とゝゝゝりく古渕田川といへり云云此流
うけひかれのゆり土人の古渕田川といへるよりとり
きて此義田史の口碑に伝ふるはまくさにその據を
ゝゝを今は渕田川を武蔵本紀の境なること論を
へくもゆゝ次古きふゝゝもその流をくれゝ今いへ古
渕田川も武蔵と足立郡の境なれと本紀古
よりの渕田川とゝゝめとゝゝ又今は渕田川と称
ゝゝ地八二百四五十年の前を海ありといふを花ゝゝり
は祝ふ人〳〵国雑記北国紀行梅花無尽蔵等
の書ゝゝ三百四五十年にはゝるものなり是ふ

のこる所なしそもそも又江戸古圖といふるものこれ
よくはかりたて土人の法をあつまへ信しく古記をよくこれ
世の人成まことをこそまこと多事
按ずるに隅田川八葛飾郡を隅田村といふ地ありてそこ
ハ濱口なるゆゑを隅田川と称しる説通して此川
の名ハ唯名人粧戸田村の渡のかりにて戸田川
といひ淺草ハかりにてもの淺草川といふのこと又
宮戸川といふるも今の三谷といふ所昔をこやこと唱へん
そこゆゑを以名ありしやハ又水上を荒川といふを秩父
大滝より出るゆゑを表科といふること水源を信濃國
こと殺すれども本源にて秩父郡中津川をもて源と

こと殺すれども本源にて秩父郡中津川をもて源と
秩父郡こと習ふ
こそ一大川とあり樋沢男衾兩郡の間を奔り
大里郡にて東南をひたすらひたすらを足立郡の地方を横見
比企入間新座四郡の地方を過ぐ豊島郡に入るこれ
ところの左右ハ足立郡の地方を横見と比企
の境なる市野川も荒川に會し比企入間の間にて八
都幾川押垂川入間新座の間にて入間川新座郡に
て柳瀬川柴目川豊島郡にて八澁谷川ともに荒川に
會ずるこれ今の隅田川の源流大略このごとし
又元荒川といふる大里郡熊谷宿の西より今の荒川
こと分れ埼玉足立郡の間にて八綾瀬川

上毛國甘樂郡の水も秩父郡の水と

[illegible]と云 四国雑記に[illegible]の儒と[illegible]云云[illegible]と云[illegible]
[illegible]云云[illegible]
何人[illegible]
綾瀬の字を[illegible]
流[illegible]の紙綾瀬の本流[illegible]一流を東小の方より分て利
根の分流と[illegible]埼玉郡の中央を東流し岩槻越谷を
歴中島[illegible]
八條領と葛飾郡二合半領[illegible]の間を南流し猪股[illegible]
西を過て渇田川と利根川との間紙[illegible]
川と云さて綾瀬の本流ハ[illegible]と埼玉郡との間をなる事
数里[illegible]
して[illegible]郡千住二町目分と葛飾郡渇田村の間[illegible]て
渇田川と[illegible]

今の須田村と[illegible]
[illegible]
足立郡埼玉葛飾三郡の堺[illegible]元荒川と[illegible]南流西
折[illegible]今も[illegible]村の北[illegible]古渇田川の跡[illegible]
あり[illegible]
[illegible]
より後[illegible]堤を築き溜[illegible]
渇田川ハ今の荒川をもて本流とすれと上[illegible]
今も綾瀬川の上流元荒川といへ今の荒川ハ
入間川を流[illegible]十餘里を経て西園の中より東元
荒川と合して結乳山の西を流[illegible]ハ渇田川
[illegible]渇田村の[illegible]より称せる名[illegible]て源ハ[illegible]

發するといふ入間利根の二水を相合するゆゑを義經
記に渕田川を上野國利根郡といひ更級日記に
もと井川在五中將のいさこゝにくんといふこゝをひ
北國紀行に利根入間の二川おちかゝるといひ方角抄に
入間の川のみなれの末なりといふ共に猶考るに二水
說に合して落る所下流より入るをけつて利根川の末
なる入間川の末なるいつゝ又義經記に末にやりてある
在五中將の渕田川と名付けるといふを今時の人名市
川のなまりにて渕田川と合せやうなゝ猶考へんを
雜記と義經記に末にいりてはといふをみるべきはと
いふりうけける文なまへ市川の渡より八遠とよりて

利根川をも渕田川の水とも如何なるやは
又按るに渕田川武蔵の堺なるものゝ堺より奏陽
をも當今利根川をもて武蔵の堺と定めたり
歷その沿革ならく再訂江戸砂子元録のころ
郡のさのひをかゝるとみるに猶考へんを天明三
年本所中郷林鶴鳥別莊の庭に建る碑に葛飾郡
本下總國也貞享三丙寅春閏三月割利根川西屬武
蔵國と去る世ゆる伊奈氏の旧簿を據とせるより
始まる正保二年に國圖に利根川の西乃地を
本州に國〻たまへるとあるに疑ふ記にも一説に中
川を堺とするの方を武蔵の葛飾郡と唱へ東の方を

下総の葛飾郡といへる所にて播磨なる所にも侍る

源師頼卿　堀川百首

住田川みなせをたかく侍るなる所にて

源俊頼朝臣　歌枕名寄

契おきてくだくるなみ侍れ角田川かくれぬ水のこころ

二條皇太后宮大貳　家集

君代をちとせをかけてくだくなる川かりまくの波新古今

後京極藤原良経公　月清集

むかし思ふ角田河原とかるるあるなるあまの苫屋

藤原俊成卿　新勅撰集

わかるるとへ人とはなるやうらとなるなるなる

住田川せきりにもせぬ水のあさはかなれ共ひさしかるへん

おとゝはん誰のゝ家こ角田川名ゆ〻多ハはりやゆ〻やと　後鳥羽院御製　御集

うちるすゝこ川ゆ共ゆ〻ゝ　後德大寺左大臣藤原實定公　家集

ゆ〻ゝ多まて〻みる時なりすゝこ川いさこゝゆん名におそ花も　藤原定家卿　家集

水くきの跡かきとゝめすゝこ河こゝゆ〻ゝゆ人もとひこす

夕霧にこゝ河住ぬすゝこ川我友舟をはりやゆ〻やゆ　同　藤川百首

渡るわゝゝぬさゝこうちかゝせすゝこ川原の多るの名もし　藤原家隆卿　壬二集

すみゝ川これもとをきゝ多ゆ月をまりてふ多るの名もゝ　同　玉吟集

こゝゝゝそ思ひ〻ゝゝ多る物多て〻やゝき袖をや濡ゝん　寂蓮法師　家集

心あゝハすゝこ川原ゆ渡るあゝハ花のゝゝ多る時なり　同　文本集

ゝゝひ文ゝれやゝゝゝんいる渡ゆ隅田河原の秋乃ゝゆ月　順德院女房　建保百首

行意僧正

都鳥角田河原に船出せんとて人〳〵わかれを
惜こゝろ伊勢河原月夜
藤原家衡卿
むつ〳〵思ふ心をいとゝ角田川蓍ひかりの渡りかな
藤原俊成卿女
蓍坂ふ月を雲井と角田河なるゝ程なくなる
同
那ことゝ分〳〵月をこゝろ川なるれば
兵衛内侍
なつかしき家ふ事とゝ那なるともやはなるの外ハこゝろ東
藤原忠定朝臣

宮ことりみやこふとゝ角田川なるゝまゝ年月ハ
藤原知家卿 現存六帖
すみだ川名ゝ川鳥ハ那ゝ月ハ紙をゝむ山のゝ
同 建保百首
伊勢川河ふ角舟ハ那ゝ月をゝゝ世ふ
同 文木集
名ゝ川ハ那ゝ月をゝゝ角田川蓍ハ那ゝ月のゝ
藤原範宗卿 建保百首
わゝるゝ月ゝ那ゝゝゝゝ川ふ角田ゝ名もゝし
藤原行能卿
藤原康光

渡守さそ〳〵やそしま〳〵角田河ぬれぬとていそく舟を待〳〵ん

藤原為家卿　現存六帖

新勾あ〳〵ハとはゝ〳〵すゝこ川きゝわたりてや人をとゝめ〳〵

同　夫木集

みやこ思ふ有明月のさゝこ川わたるのけしきいと千鳥なく

後嵯峨院御製　新拾遺集

かきり知ぬく遠くきこゆるはみやこのこゝろ思ふ人つ

藤原信実朝臣　現存六帖

さりとても程やいたゝ我すゝこ川わたるあとの郭公

藤原隆祐朝臣　新後古今集

世ゝはよう〳〵年とは〳〵角田川をゝゝ方の名ゝ名をうし

おゝこ〳〵ん角田河原の郭公むかしの名ゝ跡と鳴なり

後九條　藤原基家公　夫木集

中務卿親王　宗尊親王　續古今集

八重ゝ山ゝの名ゝ川原ゝ名ゝ〳〵ゝ山のゝ名ゝ名ゝやゝとゝ

よみ人しらず　續拾遺集

ゝ名ゝきゝて恨〳〵き夏のうちをおゝゝ名ゝ名ゝ

藤原光俊朝臣　現存六帖

角田川むゝ〳〵きゝ名ゝ今ゝゝ八月をうき橋のゝる世ゝ名ゝ

此うゝ八康元ゝ年康角社ゝまゝうゝゝゝの角田川の

渡り絶ゝれ八かの渡り今ゝ渡橋をわゝ〳〵ゝ

清輝法印　新後撰集

宮古をいく世つもりてすみこ川ゆきこの人こそ名のみとどまれ

後二條院典侍 玉葉集

ことゝはぬこゝろぬ月のすみこ川ながれ友とこゝるかひもなし

頓阿法師 草菴集

さゝこ川秋霧ふかゝ渡るなりやゝやゝこゝぬそこゝろ

中忠 歌枕名寄

思ひあまく杉のくはゝ遠くさゝこ河こゝろ〻わたりけ萩の葉月

堯惠法師 北国紀行

浪の上ゝむかしこゝるさゝこ川霧や立つきこゝる月波

同

杉りけて今を所ゝむ角多川ながれ流る神の名ゝ

道興准后 田園雜記

古塚のこのけ杉ゝのさゝこ川岡ゝこゝりてをぬるく猫の面

同

おくゝむ名たゝ見ゝ濁田河郡ゝと思ふ杉ゝ屋ゝ

同

思ふ人ゝ名ゝ名ゝ角田川名をとゝまく紀郡ゝかれ

同

秋の名ゝさゝこ山ゝこゝ名ゝ名ゝ名ゝ名ゝ名ゝ

平氏廉 武蔵野紀行

都鳥ゝみたゝ名ゝ名ゝ名ゝ名ゝ名ゝ名ゝ名ゝ

盧崎

類字松葉歌林抄に総又こぬこの浦と讀合せる歌と駿河に載せ奥基法師の歌代々総に載せて名所物名寄

萬葉集に云盧前

勝地吐懐編に此歌を万葉第三にのり此盧崎といへるそうりく駿河に有る甚ゆゑ名所井蛙抄第四に出せるを出しく注云駿河國なり駿河なるおもしろきもあれやいかなる所角田川第に名にそかなしねしとよめりと有

桜をはこ駿河の唐崎も百年家風濤の変りて海に入り今はなし

江戸砂子に云庵崎清地村ちとせ稲荷の名を云

再校江戸砂子に云此庵崎に地名を駿河國の名所にしるしたる川の地名武蔵と同名なり中にも此川をは不知案内のものの角田川の和歌とよりて蜻蛉せるものの歌まつちやまとえとれいの歌は駿河のすそ川なり名めいおとくの歌を此隅田川なり駿河の歌にとりてまつちやま唐崎とよびに名つけ〳〵ものあんれ清地村より此地名なき事必せり

駿河國志に云唐崎又機崎とも云唐崎は唐衣崎の略別にして唐衣の和崎を云

隅田川考に云唐崎は中古より此所をその名あり

とゝ見ゆれと四路を傳へし加茂堤の関の流れ後の世にいか
海といふる村の名出来しより人と異人と同じ志ゝ
とゝふこれもうきてゝることゝゝまつらみをまさく
紀伊國とゝいゝて昔よりその和名ゝ名れとあれは世乃
ゝゝは志ゝゝく知きゝく康元ゝ年九月光俊卿居家
爲にまうてゝられし時この隅田川のかゝるゝゝていわさた
の隅田川系に見へゝまぬ関やの里ゝやゝこゝまう
世歌ゝ文集ゝ出ゝゝり見よられい中古この角田河系
此やゝゝみいわゝきゝといふ地名も知りしるかゝ讀
まゝ為ゝ

抽ゝ為ゝ無基法師の歌ハいわ海のゝゝゝ川とゝけゝく

おゝゝゝ又知為ゝゝゝもあれやゝとゝゝゝゝていわ海ハ下
絵ゝ知ゝゝる海ゝゝ出ることゝ甚理あるゝ似ゝれゝゝも以か
海のゝゝゝ川とゝゝゝけゝゝゝゝハあゝゝの海の知ゝ海ゝ玉
のゝゝゝの池とゝゝゝゝもゝ知ゝゝ知ゝ海ゝ海の池
知ゝの名ゝれの和とゝゝゝゝゝゝゝゝゝ海ゝの池
ゝゝゝもゝれやいゝゝゝのゝゝゝ川とゝゝゝけゝゝも知ゝゝ
海ゝゝゝ川二國ゝ同名ゝあゝゝゝゝゝ中祐氏の光俊卿
居の歌枕ゝゝゝく生の関ゝ流ゝゝゝゝ海ゝ状ゝゝ
いゝゝき ゝゝゝの如乃志ゝれゝゝゝゝゝみなゝめ

土御門院御製 御集

ゝゝゝの生ゝゝゝゝ川風ゝ氷のかゝゝゝゝく月ゝゝけ

いほ病やとまる河原の病の枕もとまでとはぬ夢かな　源家長朝臣　吏本集

かりやとる又宿もとまるんいわ病ふしまる川原に生ふる人の門　藤原為家卿

夕されば雁鳴くなり唐崎の角田河原に手をる明なり　荒木田氏忠

今宵まで雁宿るんいわ病の角田河原の秋の月かな　順徳院御製

我為にもとまるひとはなかいわ病の角田河原に宿やこるまし　祝部尚長　新拾遺集

須田渡

松葉に下紐名寄小枕類字名寄歌林載せられ

吏本集に云南国下総を

又云源経兼朝臣夕霧にすまの渡にうえ侍りし人よ

そよ夢きこゆ明り歌別者基俊云左寄詠者なり

もゆるわとこのわとりとよみこそ侍りけるまこと

ゆや見る業平朝臣いさこゝうんとよゝくうれこれ

いこゝまこゝ知手すこゝろ明りこゝ川のわとりよ行りる

てこゝこゝけるよゝこれこゝ知ひこゝあくゆるゆやあんん

こゝ云云

吾妻鏡に云　須田小大夫　文治六年

又云角田太郎 建暦三年
又云角田入道 建長二年
按ずるに須田渡は今菅節郡渭田村なり長禄國
ゝも須田と称りしかとも渭田の畧語なるべし
地名なと畧ていひしる古今同まさる迹今此渡口を
渭田村より豊島郡橋場村との間ゝなりされは渭田川
の渡又橋場のゝゝさるといひ橋場村ゝては橋場の
ゝゝ又生麦の渡とも竜ゝの地名紙
のく渡口の名は略ゝ
夕霧にゝゝ此渡ゝゝ

源経兼朝臣文本集

たるゝと須田のかゝを約ゆけはかゝるわゝも渡ゝ

右蔦餝郡

藤原季経卿

闕屋里

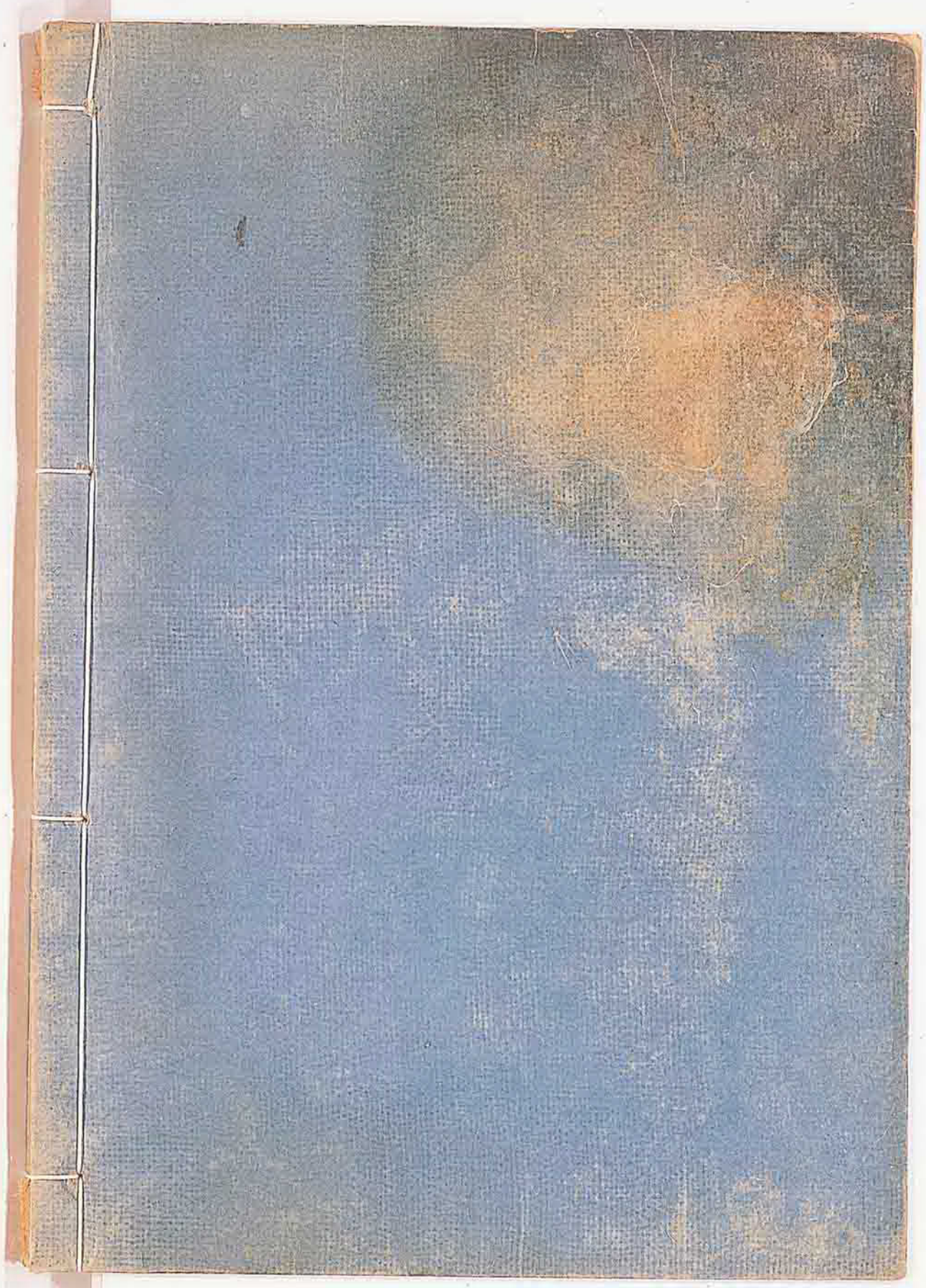
名寄に下総松葉に下総或は武州と注し名寄按類字教林或は
長禄年中江戸國に闕屋ゝり 渭田川の東原と須田との間ゝ在
榮一郎ゝ云闕屋の里は事いつくゝも未ゝ或人の云角
田川のゝ紀牛田ゝ云ゝ西宵ゝゝり
江戸砂子ゝ云闕屋の里本母寺のゝゝ牛田ゝあり
駿河國志ゝ云闕屋里は清見ゝ関の里をいふ今清見寺ゝ

東のうちに関と云墨あり長明道の記と関屋の墨と亦たく
みといふべあり
江戸往古圖況と云関屋村今此名なし関屋墨とて市毋
寺うしろ半田と云所と甚近くの私二本ありよし
或書に云関屋墨は墨田郡半田某師の墨と関屋乃
天神といふあり此あるべしなんとも又也しの墨八今すこ
し川の中にありくその証拠なしとも云
隅田川考と云関屋の墨も隅田川のかたなるべき海
なれとまさしくその不ふるる事を考へに江戸古圖とて
ものにも隅田川より東の方に関屋と云る也しかるに又
いまも毋寺氏のとりなをいふ関屋の墨といふるいふ海のすこ

とその東に日光道の関屋の墨とやかまし社乃
正保書に云慶元年九月角田川の渡りまくこの
渡りの上の方に川のなかに法きく墨のある我身ぬれ八
関屋の墨と申は第一海船も多くと所りとと云也
光俊卿考陸の國慶安面の社にまうてこれこの隅田川
の渡しに越なひし時乃これ也よりく拾ふ
隅田川の渡の上の方に関屋の墨ありといて別さの
川の出ひの方なんなるもはなんこ八古圖にのする実
屋といふものその所多しなんいまこの関屋の墨八往古
隅田川のうちにくく墨なりといふ所ある屋くとはなし
拾ふとこと関屋の墨八今墨田郡半田と云所の説後屋

所謂関屋の天神は千住掃部宿なるべし宿の高家
藤原氏なるものゝ屋敷の中に祠ありこの本さらの
下に方二尺許の石ありあるいは半田八郎左衛門
尉なりて西光院とのゝ菩提寺なる寺の跡なる地に
相近くといふこと同郡誌に見えたれともいまゝの
関屋の里は別なりとぞ思はるゝ

藤原光俊朝臣 歌枕名寄

いとゞ藤のさゝなる河原に百ちゝ五十の関屋の里に宿れる

右足立郡